

歴史的思考力の育成を目指した一実践

知識構成型ジグソー法を用いて

鎌倉幕府の滅亡を考えさせる

永松 靖典

はじめに

鎌倉幕府の滅亡に関しては、近年細川重夫氏の著書が話題を呼んだ。⁽¹⁾元寇以後に得宗専制体制を強固なものとし、その専制体制を確立したかに見えた鎌倉幕府が、なぜあつてなく元弘三(一二三三)年に崩壊したのか。中世史研究のうえでも大きな課題の一つとされているようだ。

今回、知識構成型ジグソー法を用いて、鎌倉幕府の滅亡の原因を生徒に考察させる学習を行った。歴史研究上の大きな課題を生徒に取り組ませることにより、歴史的な思考力の育成を図ることができるのではないかと考えたからである。なお、今回の授業実践は、富山県教育委員会が行っている「教師の学び支援熟事業」の一環として、平成二十六(二〇一四)年十月十八日に富山県立高岡南高校の二年生に実施させていただいたもので

ある。富山県教育委員会及び富山県立高岡南高校に心から感謝申し上げたい。

知識構成型ジグソー法について

今回、授業実践で用いた知識構成型ジグソー法は、近年、大学発教育支援コンソーシアム推進機構が、新しい学びの方法の一つとして積極的に提案しているもので、埼玉県教育委員会をはじめとしていくつかの市町村で実践的な研究が進められている。筆者は埼玉県教育委員会や埼玉県総合教育センターに勤務していた折に、知識構成型ジグソー法についてその具体的な実践や効果に関する研究に学ぶ機会を与えられた。退職後、再任用教諭として教壇に復帰し、知識構成型ジグソー法による新しい教材を開発してみたいと考えていたが、今回鎌倉幕府の滅亡の原因を考察させる生徒主体の授業として実践したところである。知識構成型ジグソー法について、簡単に紹介しておく。⁽²⁾

知識構成型ジグソー法では、第一段階の「エキスパート活動」として、いくつかのグループが三つないし四つの異なった学習課題に取り組み、学び合いの活動を通してその学習課題をより深く理解する。次に、そのグループを解体して、異なった学習課題に取り組んだ生徒が一人ずつ集まって、新たなグループを形成する。この新しいグループでの活動を「ジグソー活

動」という。新しいグループでは、「エキスパート活動」で異

なった学習課題に取り組んだ生徒はそれぞれ一人のみであり、

その生徒が「エキスパート活動」で取り組んだ内容を互いに発表し合う。こうして三つないし四つの「エキスパート活動」に

おける学習課題の内容を全員が深く理解したうえで、その授業の目標となる課題に取り組む。課題は問いの形で提供されることが多いので、その問いを「ジグソー活動」のグループで考察するという協調的な学習を行うことが一般的である。「ジグソー活動」の後、課題に取り組んだ内容を各グループが発表し、

お互いにその内容について質疑や討論を行う「クロストーク活動」を行い、生徒がそれぞれの思考や理解を深める。この一連の学習活動を知識構成型ジグソー法というが、この学習活動を通して、生徒自身が主体的かつ協調的に学習課題の理解を深め、学習の目標である課題を考察したり理解したりすることになる。

今回、知識構成型ジグソー法を授業方法として採用したのは、全員がどのような形であれ参加することが必須とされる生徒主体の学習方法であることや、三つないし四つの学習課題から一つの課題に収斂させる知識構成型ジグソー法を用いることが、歴史事象の動因をいくつもの要因から多面的・多角的に考察させるために有効な方法であると考えられることなど、歴史学習における歴史的思考力の育成に知識構成型ジグソー法の利点が一

生かせると思ったからである。

授業の様子

実践授業を高岡南高校で実施した十月には、通史的に概説を戦国時代まで授業されており、鎌倉幕府の滅亡についても、教科書に記述されている内容については学習済みであった。したがって、教材は一連の学習が終わったところで「単元のまとめ」的に実施するものとして構成した。

まず、「エキスパート活動」に入る前段階として、すでに教科書と学習ノートを使って学習したことを踏まえて、生徒一人一人が鎌倉幕府の滅亡の原因をどのようにとらえているかを簡単に調査した。そのあと、「悪党の活動」「天皇家の分裂」「得宗専制体制」の三つの学習課題を用意し、「エキスパート活動」を行った(資料1・2・3参照)。「エキスパート活動」の学習課題は、教科書のレベルを少し超えてより詳しく学べるように作成したため、高校生にはやや高度なものとなったが、高岡南高校の生徒はしっかりと読み込み、それぞれの課題について真剣に取り組んでいた。

「悪党の活動」に関しては、その理解を深めるために「鎌倉幕府が悪党の鎮圧に苦慮した原因を挙げてみよう」という課題を用意した。悪党が単なる荘園制秩序の破壊者だっただけで

エキスパート A

「悪党の活動」

鎌倉時代後半には、中小御家人の中から没落するものが現れる一方、経済的な動向をうまくつかんで勢力を拡大する武士も現れた。畿内やその近国では、こうした新興の武士たちの中から、武力に訴えて年貢などの納入を拒否するなど、荘園領主に抵抗するものが出てきた。彼らは当時悪党と呼ばれた。こうした悪党を取り締まり、荘園公領体制の動揺を鎮めることは、強盗や山賊行為の取り締まりが守護の職務と御成敗式目にも規定されたように、鎌倉幕府の義務であった。しかし悪党の鎮圧には幕府は苦慮することとなった。

13世紀半ばは、商業の発展など人や物の流通が拡大し、貨幣経済が日本中に浸透し始めた時代である。荘園公領制に敵対する悪党は、商業流通の拡大がもたらす富を求めて、村々を襲ったり、山賊のような暴力行為を行ったりしたが、その活動は従来の荘園や公領支配の領域を超えた広範囲の活動であったことも幕府が対応に苦慮した原因の一つである。そして、その悪党の中に一部の御家人や得宗の被官（従者）が混じっていたことも幕府にとって大きな問題であった。

さらに、悪党の一部が当時の朝廷や大寺社などの支配層と結びついていたことも幕府の鎮圧を困難にした。悪党の典型とされる播磨国矢野荘の公文（荘官の一種）であった寺田法念は後醍醐天皇の側近と結んでいた。また悪党的武士の楠木正成も和泉国若松荘を通じて、後醍醐天皇側近の僧文親の弟子と結びついていた。

幕府は1319年、地頭・御家人を動員して悪党の在所を焼き払わせたと、1324年にその強圧策の中心であった六波羅探題の大佛維貞が鎌倉に帰ると、悪党の活動は以前に増して活発となったという。『峯相記』という本にはこれが「元弘の重事」（鎌倉幕府の滅亡）を引き起こした「武家政道の過失」と指摘している。

問 下線部について、鎌倉幕府が悪党の鎮圧に苦慮した原因を挙げてみよう。

資料 1

エキスパート B

「天皇家の分裂」

天皇家では、後嵯峨上皇の死後、天皇家の家長（これを「治天の君」という）を巡って、後深草天皇と亀山天皇の兄弟が激しく争った。幕府の斡旋で後深草天皇の皇子（伏見天皇）が亀山天皇の皇子（後宇多天皇）のあとと皇位につき、以後、持明院統と大覚寺統の双方から順に天皇が出て、「治天の君」も交代で出ることとなった。

1308年に後二条天皇が亡くなると、花園天皇が即位して、後二条天皇の弟の尊治親王（後の後醍醐天皇）が皇太子となった。後宇多上皇は、嫡孫の後二条天皇の皇子の邦良親王の成長を待つ中で尊治親王には「一期の後、悉く邦良親王に譲与すべし」と言い含めた。

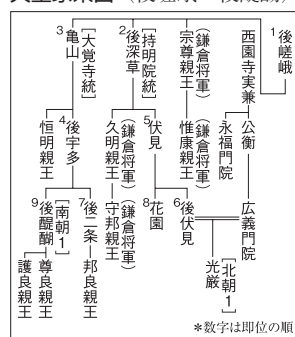
1317年、伏見法皇（上皇）が死ぬと、後宇多上皇は幕府に働きかけ、1318年、花園天皇を皇位に追い込み、自らが再び「治天の君」となって、尊治親王を即位させた。この時、持明院統は邦良親王の後に後伏見天皇の皇子の量仁親王（後の光厳天皇）を皇太子として立てるという約束を得たことから、早く後醍醐天皇を皇位に追い込み、邦良親王を天皇に立て、量仁親王を皇太子に立てるという戦略をとることになった。大覚寺統の後醍醐天皇派と皇太子邦良親王派、持明院統の3つの派閥が争い、幕府への働きかけを強めた。

後醍醐天皇が「一代限りの王」というくびき（束縛されるもの）から抜け出て、政治的手腕をふるい、自らの子孫に皇位を伝え、「治天の君」になるためには、こうした状況を打破する必要があった。特に「兩統迭立」を強制する幕府は大きな邪魔者であった。後宇多上皇が1324年に亡くなると、後醍醐天皇の討幕は具体的な行動として現れることになる。

問 なぜ後醍醐天皇が討幕行動を起こしたのか、その理由を上記の文章から挙げてみよう。

資料 2

天皇家系図（後嵯峨～後醍醐）



エキスパートC
「得宗専制体制」

蒙古来襲後も、鎌倉幕府による戦時体制は続いた。異国警護番役が引き続き課され、西日本の非御家人に対する幕府の支配が強化された。鎮西9カ国について、その訴訟が幕府の直接の管轄下に置かれ、やがて鎮西探題が設置されて、九州は幕府の強い統制の下に置かれることになった。

1284年、北条時宗が34歳で亡くなると、その子の貞時は14歳で執権となったが、実権は得宗家の執事（得宗家の家臣を御内人といい、そのリーダーを執事という）である平頼綱が握った。頼綱は、1285年11月に霜月騒動で有力御家人である安達泰盛を滅ぼした。成人した貞時は1293年4月にその平頼綱を討って執権としての権力をようやく確立したのである。1293年、貞時は引付を廃止し、裁判の最終判断は貞時一人が握る体制を成立させた。1297年には永仁の徳政令が發布された。これは惣領制が緩み、御家人体制が解体していくことに対する防衛策だった。貞時の時代には、得宗家を中心に北条氏一門や御内人による権力集中が進んだ。北条一族の守護は霜月騒動後の1285年には28カ国に及び、幕府滅亡前の1333年には30カ国になっている。しかも交通の要衝は得宗家が押さえていた。

貞時は1311年9月に41歳で死去。得宗家の家督を継いだのは高時である。高時は9歳だったので、御内人の長崎高綱・高資父子の専横が始まった。高時は1316年に執権となり、得宗権力の専制化はますます進んだ。しかし、北条一門の金沢貞顕は高時を「田楽のほか他事なし」と批判している。金沢貞顕は執権高時を補佐すべき連署である。高時は『保暦間記』という南北朝時代前半の歴史書にも「頗る亡気の跡にて、將軍家の執権も叶い難かりけり」と評されている。1321年には、高時は専横を極める長崎高資を討とうとするが、失敗し、逆に長崎高資の力がさらに強まった。まもなく鎌倉幕府の滅亡である。

問 蒙古襲来後の執権政治の専制化について、具体的な事例を挙げ、得宗専制体制の矛盾を挙げてみよう。

資料3

なく、当時の権力者とも一定の関係を持っていたために、幕府にとっても侮りがたい勢力となっていたことを資料に示し、教科書的な悪党理解からさらに一步進んだ理解ができるように工夫した。しかし生徒の中には、権力者と結びついた悪党を幕府が鎮圧するという事態に矛盾を感じ、理解ができないという感想を漏らす者もいた。いつの時代のどのような社会的事象である、様々な矛盾を抱えていること、そしてその矛盾を止揚する形で歴史が進展していくことを生徒に理解させるのは難しいことであると痛感させられた。

「天皇家の分裂」に関しては、後醍醐天皇が大覚寺統の中でも嫡流ではなく、父の後宇多上皇からは「一代限りの王」と言い含められていたことを新たな情報として加えて、後醍醐天皇が自らの地位を子孫に引き継ぐことが叶わない存在であったことを再確認させた。後醍醐天皇が、当時の最先端の宋学を学び、専制的な君主を志したことは、多くの研究者が説くところであり、単に自らの子孫に「治天の君」の地位を継承させようとして討幕を図ったわけではないようだが、王統の分裂の中で、後醍醐天皇の思いを理解させるためにあえて単純化した資料を用意した。生徒の中からは、後醍醐天皇の気持ちはわかったが、それがなぜ討幕という政治行動に直結したのがよくわからないという声があった。生徒の中から後醍醐天皇の思いのみに焦

点化した資料は不十分だとの指摘があったことは、生徒の歴史的思考力が一定程度育成されていることの証であると積極的に評価したい。「ジグソー活動」の中ではかの生徒の報告や考え方などを聞いたうえで、もう一度考えてほしいと助言した。

「得宗専制体制」については、北条貞時による専制体制の確立と高時時代の長崎高綱・高資の専横を少し詳しく資料に書き込み、執権政治の専制化に関して、「得宗専制体制の矛盾」を指摘させる学習活動を計画したが、生徒は「矛盾」という言葉で表現された鎌倉後期の得宗専制体制の課題や問題点を考察することができず、得宗体制が御家人一般から遊離していったことに注目することができなかった。生徒のプリントをあとから確認すると、霜月騒動などを具体的に挙げて、幕府内部で争いが繰り返された点を指摘しているものが多かった。幕府内部で執権の権力をめぐる権力闘争が繰り返されたのは、すでに執権政治が確立した頃からの矛盾（課題）であり、鎌倉後期の得宗専制体制の固有の矛盾（課題）ではない。惣領制の解体に伴う、御家人体制の機能不全の中で、その政治的代替物として得宗専制が実現したことに気づいてほしいと思ったが、残念ながらそこを指摘した生徒はいなかった。「エキスパート活動」の「問い」をどのように立てるかが、知識構成型ジグソー法におけるそれぞれの活動のいわば「肝」であることを再認識させられた。

「ジグソー活動」では、鎌倉幕府滅亡の要因として「悪党の活動」「天皇家の分裂」「得宗専制体制」が複合的に働いたという前提のもとで、「エキスパート活動」での学習を踏まえてこの三つの要因の重みづけを円グラフ（ 100% ）で表現させた。⁽⁵⁾一〇の班の結論は表1の通りである。

「悪党の活動」を 60% とする班から 20% とする班、「天皇家の分裂」を 50% とする班から 10% とする班、「得宗専制体制」を 50% とする班から 25% とする班など生徒たちの結論は大きく分かれた。次いで各班の代表者から、結論及びそのように考えた理由を発表させた。発表の後、各班に対する質問を求めたところ、「天皇家の分裂」を 50% とした二班から 10% とした四班に「なぜそのような少ないのか」という質問があった。四班からは「悪党の活動が大きな要因で、後醍醐天皇個人の思いが歴史を動かした部分は小さいのでは」という答えがあったが、それに対し

	悪党の活動	天皇家の分裂	得宗専制体制
1班	20%	45%	35%
2班	25%	50%	25%
3班	30%	30%	40%
4班	60%	10%	30%
5班	30%	30%	40%
6班	20%	40%	40%
7班	50%	20%	30%
8班	35%	15%	50%
9班	20%	30%	50%
10班	30%	45%	25%

表 1

て二班は「後醍醐天皇が元弘の変まで挫折にめげず討幕を志したことが決定的な要因と考えられるのでは」という反論も出た。授業時間が終了してしまい、「クロストーク活動」がそこで途切れてしまったのは残念であった。知識構成型ジグソー法では「クロストーク活動」に十分な時間を保障しないと、生徒自身に主体的に考察させ、その活動を通して思考力を鍛える学習は十分にその目的を達成できないことになるが、五〇分間の授業で、そこまで実践することは物理的に難しい。筆者も知識構成型ジグソー法を実践するたびに痛感している大きな課題である。平常の授業の中に知識構成型ジグソー法を取り入れていくためにはいつその改善・工夫が必要かもしれない。

本実践による生徒の変容

本実践では、この授業による生徒の歴史的認識や思考力の変化を可視化したいと考えて、授業を行う事前・事後の調査を実施した。調査は、鎌倉幕府の滅亡の原因を自由筆記させたもので対照した（主な生徒の記述については表2参照）。

全体的に事前の簡潔な記述から、学習を終えたあとは記述量が増加している。記述量の増加が生徒の思考の深まりを直接意味するものではないかもしれないが、複数の要因を総合的に記述することができるようになったこととして一定の評価をした

い。また、中には「クロストーク活動」を踏まえて、考察を深化させたものもあり、一定の学習成果があったと考えられる。

たとえば事前の調査では「元寇で多くのお金が使われたり、土地がなくなったりしたから。」と書いた生徒が、事後では「私は今日の学習でのみんなの発表を踏まえて、鎌倉幕府の滅亡は悪党や専制体制で幕府の地盤が緩んでいるときに、後醍醐天皇が計画した討幕が大打撃となったことによると思います。後醍醐天皇の討幕にまで幕府は手が回らなかったのだと思います。」と、複数の要因を適切に評価して歴史的事象を考えるようになっており、歴史事実に関する認識が深まったと評価できる。別の生徒は事前には「新田義貞が鎌倉を攻めた。足利高氏が六波羅探題を攻め落とした。得宗をつぶした。」と記述したが、事後では「後醍醐と悪党の絡み合い。得宗の勢力拡大。持明院統は後醍醐が邪魔だった。これらのことに対処できなくて幕府は不安定になり、滅亡した。班では悪党の活動、天皇家の分裂、得宗専制体制だったが、改めて考えると悪党の活動、天皇家の分裂、得宗専制体制ではないかと思えてきた。」と「クロストーク活動」を踏まえて、考察をさらに深めている。また「將軍が飾りだけのものとなってしまい、執権であった北条氏が力を握っていくことになったので、権力を取り戻したいと思っていた後醍醐天皇について行った武士によって攻められて滅

表 2

	授業前	授業後
A	元寇 九州の御家人対応＞幕府からの給与なし⇒御家人の不満 幕府派と反幕府派の誕生	悪党の活動の活発化や範囲の拡大、得宗専制体制の崩壊。こうした情勢の不安定さを見て後醍醐天皇が前から計画していた討幕作戦を本格的に開始したという様々な要因が重なって鎌倉幕府の滅亡につながった。
B	武士は分割相続による所領の細分化、元寇の際の恩賞の不十分、貨幣経済の流通によって生活が苦しくなり鎌倉幕府に不満をぶつけた。	幕府内部の分裂により、得宗専制政治に反対していた人が悪党の中に入り、悪党が天皇家の分裂を利用して幕府を倒したのだと思う。悪党は天皇家の者、大寺社とも手を結び幕府は手を出せなくなったのではないかと思う。
C	元寇の時に十分恩賞を与えられなかった。貨幣経済が発展したから。	幕府内が混乱して、幕府に不満を抱くものが現れたうえに、悪党を倒さずにいたところその勢力が強まり、天皇からの呼びかけもありそれに応じて不満を持つ者や悪党が蜂起したから。
D	北条得宗家の専制政治。幕府への積もり積もった不満。御家人から信用を失った。	本来トップであるはずの将軍をさしおいて、得宗家が権力に執着したこと。得宗家が権力を持ちすぎたこと。幕府にも内部分裂があったこと。幕府に従わない武士が天皇家・大寺社とつながりを持ち、討幕に立ち上がったこと。天皇家に幕府が介入したこと。
E	得宗専制政治や元寇後の生活の窮乏による御家人の不満の増加。	得宗専制政治によって御家人の不満が高まり、重用されていた御家人の権力が強まり、1321年の長崎高資の暗殺失敗を機に、御家人と執権の権力が逆転し幕府の状況が不安定になった。元寇以後勢力を高めた畿内の悪党と両統迭立から抜け出して権力を独占したい後醍醐天皇が手を結び、勢力の弱まった幕府を攻め、鎌倉幕府は滅亡した。
F	元寇で多くのお金が使われたり、土地がなくなったりしたから。	私は今日の学習でのみんなの発表を踏まえて、鎌倉幕府の滅亡は悪党や専制体制で幕府の地盤が緩んでいるときに、後醍醐天皇が計画した討幕が大打撃となったことによると思います。後醍醐天皇の討幕にまで幕府は手が回らなかったのだと思います。
G	盛者必衰の理。貨幣経済の発達。元寇による御家人たちの疲弊。恩賞が与えられなかった。徳川家康のように源頼朝に先を見通す力が足らなかった。	得宗専制体制の矛盾が拡大し、本来はどちらも将軍のためにいるはずの執権と御家人が霜月騒動で対立するなど、幕府内部が分裂、崩壊を起こしていた。そこに自身の野望を秘めた後醍醐天皇が邪魔な幕府をつぶすため、悪党を味方につけ、外部から崩壊させていった。かくして幕府は滅亡への道をたどっていった。
H	新田義貞が鎌倉を攻めた。足利高氏が六波羅探題を攻め落とした。得宗をつぶした。	後醍醐と悪党の絡み合い、得宗の勢力拡大。持明院統は後醍醐が邪魔だった。これらのことに対処できなくて幕府は不安定になり、滅亡した。班では悪党の活動＞天皇家の分裂＞得宗専制体制だったが、改めて考えると悪党の活動＝天皇家の分裂＞得宗専制体制ではないかと思えてきた。
I	将軍が飾りだけのものとなってしまい、執権であった北条氏が力を握っていくことになったので、権力を取り戻したいと思っていた後醍醐天皇についていった武士によって攻められて滅亡した。	幕府は将軍でなく得宗家が指揮をとっていて、幕府が強制する「両統迭立」のせいで大覚寺統と持明院統が争っていた。その中で、後醍醐天皇は「治天の君」になるために幕府を倒さなければならなかった。そこで当時幕府に反発していた畿内の悪党と手を結び、得宗に代わって内管領が権力を握るなど揺らいでいた幕府を倒した。原因は幕府の政策に多くの不満が募り、また、幕府内での争いがあったため。
J	モンゴルが日本に攻めてきた元寇によって幕府が武士に十分な褒美を与えることができず、また貨幣経済の発展や土地の分割相続による細分化によって武士の不満が高まったから。	巷で悪党が広がり、その中には御家人もいることがあり、対処に困っていた。そんな中後醍醐天皇が悪党と結びつき、また得宗専制体制により御家人が力をつけてきたことによって、幕府の力が弱まり滅亡に繋がった。

亡した。」と事前に記述した生徒は「幕府は將軍ではなく得宗家が指揮をとっていて、幕府が強制する「両統迭立」のせいで、大覺寺統と持明院統が争っていた。その中で、後醍醐天皇は「治天の君」になるため幕府を倒さなければならなかった。そこで当時幕府に反発していた畿内の悪党と手を結び、得宗に代わって内管領が権力を握るなど揺らいでいた幕府を倒した。原因は幕府の政策に多くの不満が募り、また、幕府内部でも争いがあつたため。」と具体的な事実を踏まえたうえで、それらの事実を抽象化して、原因を「幕府の政策に多くの不満が募り、また、幕府内部でも争いがあつた」と要約するなど、歴史的な認識を深めている。

しかし、細かく見ると、歴史的事項に関する事実誤認や理解不足の生徒も若干見られ、「エキスパート活動」の資料の内容を十分理解できなかった生徒がいたことがわかる。特に將軍と執権の關係の歴史的推移や御家人の意識の変化、さらに事前に学習した惣領制の解体に伴う政治的な影響などに関して、理解が不十分な生徒や考察が深まっていない生徒が見られた。知識構成型ジグソー法による学習では、授業者が学習内容を細かく説明する場面が少ないために、適切な配慮のもとに教材が作成されたり学習活動が進められたりしないと、基礎的・基本的事項の十分な定着・理解が図れないことがあり、今回の実践でも、

そうした生徒がいたことは強く反省させられる。

また、授業前には、元寇や惣領制の解体などの影響が鎌倉幕府の支配体制の弛緩を招いたと記述をしている者が多かったが、学習後では、それに言及する生徒がほとんど見られなかった。元寇後の社会経済的な変化を幕府の衰退や滅亡と結びつけて考えていた生徒が、事後の調査ではほとんどそれに触れなくなつたことは、今回の実践のある種の限界を示しているように思われる。「悪党の活動」に関する「エキスパート活動」の資料の内容が悪党の実態のみを説明したものに偏つたものとなつたため、生徒は既習事項である社会経済的な前提を考慮したうえで、悪党の活動を考察することが十分できなかったと推察される。また、「得宗専制体制」に関しても、惣領制の解体や貨幣経済の進展が御家人制度の変質の前提となつたことを「エキスパート活動」の学習課題で触れておかなかつたために、生徒は社会経済史的な視角から、今回の学習活動を深めることはできなかった。この点でも「エキスパート活動」の学習課題作成上の課題が残つたと思われる。既習事項を前提として学習活動を組み立てる場合に、既習事項の理解の状況を事前に十分理解していることが授業者にとって不可欠であることを改めて感じるところである。

おわりに

今回、この実践をさせていただいた富山県立高岡南高等学校はほとんど全員が大学進学を目指す、いわば進学校であり、生徒の学習に対するモチベーションも高い学校である。高校生にはやや高度と思われる「エキスパート活動」の学習課題に取り組む姿勢は流石であると感じられた。しかし、前述したように、教材として十分に熟成されていないところもあり、また日常の学習活動との関連を十分に図れていなかったこともあって、生徒が鎌倉幕府の滅亡の原因を多面的・多角的に考察させることができる材料を十分に準備することができなかった。特に社会経済史的な視角からの分析を踏まえて、鎌倉幕府を滅亡に追い込んだ主要な三つの要因を考えることができるような教材を用意できなかったことは、歴史事象の動因をいくつもの要因から多面的・多角的に考察させることを目標とした本実践では、その目標を達成するために大きな障害となった。

三つないし四つという限定された学習課題によって学びを深めようという知識構成型ジグソー法では、逆にその学習課題以外の要素を生徒たちが考慮に入れることはかなり難しいと言わざるを得ない。歴史的思考力が多面的・多角的に歴史の動因を考察したり、それらの様々な動因相互の関係性について考えた

りする中で鍛えられるものだと思えば、知識構成型ジグソー法は歴史の進展に関する動因を限定してしまうという危険性を内包していると言えるかもしれない。したがって、知識構成型ジグソー法による日本史の授業には、三つないし四つの学習課題を超えて、さらにその先に生徒の考察が進むような仕掛けを講じる工夫も必要であろう。

しかし、学習に参加する生徒一人一人が主体的に学びに参加せざるを得ない特殊な学習形態を有する知識構成型ジグソー法は、アクティブラーニングとして極めて有効な指導方法の一つであり、「エキスパート活動」の学習課題を適切に作成するなど指導に工夫を加えることによって、そうした限界を越えて一定の指導効果を発揮することができると思われる。

学習指導要領では平成元（一九八九）年以来、学習評価に四つの観点が導入され、「知識理解」のみでなく「思考・判断・表現」が大きな評価項目となり、平成二十（二〇〇八）年には新たに歴史の「解釈」や「説明」「論述」が加えられ、歴史学習の目的は、歴史的思考力の育成へ大きく舵を切った。次期の学習指導要領の改訂では「活用」の能力の育成が大きな課題になるとも言われている。歴史学習においては歴史的思考力の育成を図るための学習方法の開発が喫緊の課題である。今回の実践は、知識構成型ジグソー法を用いて、鎌倉幕府の滅亡を生徒

自身に「解釈」させ、「討論」させることを通じて歴史的思考力の育成を目指したものである。今後も、生徒自身の主体的かつ協調的な学習活動を通じて歴史的思考力の育成を図る学習方法の開発に向けて工夫を重ねていきたい。

註

- (1) 細川重夫『鎌倉幕府の滅亡』（歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、二〇一一年）。
- (2) 大学発教育支援コンソーシアム推進機構HP (<http://corefu-tokyo.ac.jp/>) に詳しい説明があるので参照されたい。
- (3) エクスパート活動の学習課題作成には、村井章介編『南北朝の動乱』（日本の時代史10、吉川弘文館、二〇〇三年）、本郷恵子『京・鎌倉 ふたつの王権』（日本の歴史六、小学館、二〇〇八年）、安田次郎『走る悪党、蜂起する土民』（日本の歴史七、小学館、二〇〇八年）、村井章介『十三・十四世紀の日本』（岩波講座日本通史第8巻中世2、岩波書店、二〇〇〇年）、熊谷隆之『モンゴル襲来と鎌倉幕府』（岩波講座日本歴史第7巻中世2、岩波書店、二〇一四年）などを参考にさせていただいた。
- (4) 網野善彦『異形の王権』（平凡社ライブラリー、平凡社、一九九三年）など。
- (5) 開発教育などではランキングの手法が多く用いられるが、理由や根拠を可視化するためには、円グラフによって重みづけを示す方が効果的と考えた。円グラフを作成させる学習方法は欧米ではよく使われるものだが、歴史学習で今回用いたような使用法は特に先例があるものではない。

(6) 土屋武志氏は、歴史的思考力育成のために「解釈型歴史学習」を提案されている（同氏『解釈型歴史学習のすすめ』梓出版社、二〇一一年）。今回の実践は知識構成型ジグソー法を用いて「歴史の解釈」を生徒に迫ったものでもある。（ながまつ・やすのり／元埼玉県立川越女子高等学校校長）